

文化庁委託事業

日本語ボランティアグレードアップ講座開催！

地域の日本語教室で外国人向けに日本語教育を支援しているボランティアの皆さんのさらなるグレードアップを目指して、これまで多方面で幅広く日本語教育を展開してきた伝統と実績のある学校法人吉岡教育学園が下記の通り講座を開催します。

日程： 2008年9月6日～2009年2月28日
毎週土曜日、全24回
18時～20時30分
*ただし、12月27日及び1月3日を除く

場所： 久喜市中央公民館 4階会議室5 他

対象： 日本語教育に関する知識と日本語教室での実践経験があり、指導力の向上を望んでいる方

定員： 30人

申込期限： 9月5日（金）

申込み・問合せ： 久喜市国際交流協会 佐々木
電話： 0480-22-9337

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第1回目が無事終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年9月6日（土） 18：00～20：40
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
（ホワイトボード・演壇・受講者用机・椅子のみ）
- ・出席者数：34名（申込者総数39名）

当日の流れ

1) オリエンテーション 18：00～18：45

- ・ご挨拶……主催団体代表 学校法人吉岡教育学園
理事長 吉岡正毅

久喜市長 田中暄二氏

企画委員長 伊東祐郎氏

- ・受講に関する諸説明……企画委員 新山

2) 講義：「今、求められるボランティアとは？」 18：50～20：30

①ゲーム：「部屋の四隅」

4つの質問に関して、部屋の四隅をA B C Dとし、自身の答の該当する部屋の一隅に集まり、講師からの質問に答えるもの。

質問1) 学びたい外国語は？

- | | | | |
|-------|--------|--------|--------|
| A) 英語 | B) 中国語 | C) 韓国語 | D) その他 |
| (55%) | (20%) | (5%) | (20%) |

質問2) 日本語は外国人にとって難しいか？

- | | | | |
|-----------|----------|------------|----------|
| A) とても難しい | B) まあ難しい | C) 余り難しくない | D) 難しくない |
| (70%) | (30%) | | |

質問3) 日本語を教え始めてどのぐらいになるか？

- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| A) 1年未満 | B) 1－3年 | C) 4－6年 | D) 6年以上 |
| (66%) | (20%) | (7%) | (7%) |

* 日本語を教えた経験がない人が、全体の35%を占めていました。

質問4) 日本語を教えることは、これからの時代、薔薇色だと言えるか？

- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|
| A) 強くそう思う | B) まあそう思う | C) 余り思わない | D) 全然思わない |
| (70%) | (25%) | (5%) | |

②レジュメに沿った解説と活動

特に、フォトランゲージの手法を用いて、写真（駅の構内や定食屋：国際交流基金の写真パネル）を見せて、どのようなことが教えられるか、写真に登場している人物の関係性を想像させ、簡潔な会話を連想させるといった活動に45分割かれ、7つのグループに分かれてグループワークをし、話し合われた内容を発表し合って共有するという流れが終始和やかに進められました。

レジュメに沿ったお話も、参加者はメモを取りながら聞き入っていました。

3)「一言感想文」記入 20:30～20:40

所感と連絡事項

第1回は、終始和やかなムードで進められ、順調な滑り出しとなりました。

参加者の35%が日本語を教えた経験がないとのことで、今後の研修内容に多少の不安を感じている様子も伺いましたが、一様に少しでもたくさん出席したいという感想が聞かれました。

開始前に、佐々木委員の紹介で久喜市の担当者とも打ち合わせができました。実習中の外国人の募集については、久喜市で把握している情報は外部に出せないという制約があり、工業団地の工場に声を掛けるなどして募集してはどうか、ということになりました。

以 上

（報告者）新山

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第2回目も無事終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年9月13日（土） 18：10～20：40
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
(ホワイトボード・演壇・受講者用机・椅子のみ)
- ・出席者数：26名（申込者総数39名）

当日の流れ

1) 自己紹介 18：10～18：35

簡単な自己紹介と講座で身につけたいこと、将来の抱負を手短に語って頂きました。
大体以下のような内容でした。

- ・ボランティアの経験はあるが我流で教えている。自信を持って教えられるようになりたい。
- ・普通の教室での活動を振り返るいい機会になると思う。
- ・他地域のボランティアの皆さんとの情報交換も出来ればと思っている。
- ・日本語のこと、教え方のことをきちんと身につけたい。
- ・日本語の教え方を学ぶのは初めてなので不安もあるが、興味がある。続けたい。
- ・外国人としてボランティアの教室でお世話になった。これからは他の外国人のためになりたいと思ひ、教室のお手伝いをしている。日本語に自信がないが、教え方について身につけたい。

2) 講義：「教えるポイントを整理して実践しよう1～これまでの教え方を振り返ってみよう～」

18：35～20：30

(途中休憩：19：25～19：35)

レジュメに沿って進めました。

前回同様、3～5名のグループに分かれて座ってもらい、以下の部分ではグループワークを取り入れて意見交換をしながら進めました。

- ・クラス形式とチューター形式それぞれの短所を補うにはどうすればいいか。
- ・日本語で意味を説明する方法を考える。
……「音楽」、「好きです」、「おいしそうです」、「食べながら歩きます」
*経験者が多いグループに後ろの方のものが当たるようにしました。
- ・「～が好きです」の練習方法を具体的に考える。

レジュメは最初に全てを渡さず、グループワークで検討したことを交換し合った後で、レジュメを渡してまとめの説明をするようにしました。

3) 「一言感想文」記入 20：30～20：40

所感

今回も終始和やかなムードで進められました。

初めの自己紹介でも、具体的な教え方を知りたい、というニーズが結構感じられました。今日の狙いは、日頃の教え方を振り返るという内容だったわけですが、普段の経験がなく学ぶことも初めてという参加者の方もいたので、かなり基本的なことから取り上げました。こういうことを考えること自体が初めてという反応も勿論ありましたが、グループワークでは色々と活発なやり取りがありました。

以 上

（報告者）新山

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第3回目も無事終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年9月20日（土） 18：10～20：35
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
（ホワイトボード・演壇・受講者用机・椅子に加え、プロジェクターと延長コードを使用。
スクリーンも借りたが、壊れていたため、壁に投影した。
パソコンは石井先生が持参された。）
- ・出席者数：24名（申込者総数39名）

当日の流れ

1) 講師紹介 18：10～

佐々木委員より、石井先生、小山の紹介があった。

2) 講義：「外国人とのコミュニケーション方法を身に付けよう1
～上手にコミュニケーションするために～」

18：15～20：25

（途中休憩：19：10～19：25）

パワーポイントに沿って進められました。補足資料としてレジュメを配布。

前回同様、はじめから3～5名のグループに分かれて座ってもらい、プロジェクターをホワイトボードに向かって右の壁に投影しました。講師は受講者の中央に立って講義されました。

- ・ くずし字やなぐり書きが読めるのはなぜ？
- ・ メシ、フロ、ネルが通じるのはどんな関係？
- ・ 「彼女」を絵に描いてみよう。
 - ① 彼女は金髪で目が青い。→隣の人と見比べてみよう。
 - ② 彼女は涙声で目が赤い。→目のどの部分が赤い？
- ・ （日本で）Aさん（パナマ在住日本人）はおしゃれなバッグを見つけ、レジに持って行った。
店員：ご自宅用ですか？
A：？（家の中でなんて使わない！）
- ・ スキーマがないと理解できない。スキーマがあれば、言語が不十分でも理解できる。
- ・ 自分の得意分野については日本語力が不足していてもコミュニケーションができる。
- ・ 日本と海外での飲食店での勘定方法の違いを考えてみる。
- ・ テーマのわからない3ページ分の文章を読んでみる。→言葉はわかるが意味はわからない。
- ・ コミュニケーションを成り立たせる「正しさ」と「適切さ」
文法・語彙・音声の知識を用い、正しい文を作る。→ルールが見えやすい。
状況に合わせて言葉を適切に使うことができるか、適切な行動ができるか。→ルールが見えにくい。文化によってルールが違う。
- ・ ごちそうしてくれた人に、次に会った時にもお礼を言うかどうか。
- ・ 異文化コミュニケーションで起こる理解のずれ→「日本にいるんだからそのようにしなさい」というのは圧力になる。

- ・ 言葉の意味のずれ→言葉は1対1対応とは限らない。
- ・ 言葉の使い方、解釈のずれ→いつ、何を、どのように言うか。
- ・ 行動ルール、社会的な約束事のずれ→私の常識は相手の非常識
- ・ 受講生の中の中国、タイ出身者に初対面の人と挨拶するときの距離をとってもらった。
- ・ 言語、周辺言語、非言語によるメッセージ→非言語情報が伝えるものは大きい、文化によって違いがあり、誤解も大きい。
- ・ 「わかる」可能性を広げる工夫
 - ① わかりやすい言語表現
 - ② 全体イメージの提示＜スキーマの活性化＞
 - ③ ゴールを明確にする。
 - ④ 自分が前提としている「常識」を相手が共有しているかを考える。
 - ⑤ 聞き手の理解の流れを分断しない。→話の筋は「一本道」に。
 - ⑥ 理解の手がかりを豊富にする。
- ・ 「お好み焼き」を見たことがない外国人にわかるように説明する。→文字化し、グループ内で意見交換。→簡単に発表。

3) 「一言感想文」記入 20:25～20:35

所感

今回も終始和やかなムードで進みました。

コミュニケーションの難しさは、外国人と日本人間だけのことではなく、日本人同士でも難しいということに、多くの方が共感していました。「わかる」とはどういうことなのか、受講者は深く感じ入った様子でした。

以 上

(報告者) 小山

文化庁委託事業
企画委員各位

第4回終了報告

標記の件、第4回目も無事終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年9月27日（土） 18：10～20：40
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
（ホワイトボード・演壇・受講者用机・椅子のみ）
- ・出席者数：22名（申込者総数39名）

当日の流れ

- 1) 講師紹介 18：10～ 新山より齋藤ひろみ先生をご紹介しました。
- 2) 講義：「生活情報の入手をサポートしよう！1～自律的学びにつなげるために～」
18：10～20：30
(途中休憩：19：20～19：35)

レジュメに沿って進められました。

前回同様、4～5名ずつ5グループに分かれて座ってもらい、以下の部分ではグループワークを中心にしながら進められました。

- ・外国人の家族構成を想定し、どのような情報が必要か具体的に考える。
- ・必要な情報がどのようにして入手できるかを考える。
- ・必要な情報から一つ選び、その情報を入手するためにどのようなことができるようになる必要があるかを考える。
- ・できるようになる必要がある項目について、地域の教室でどのような練習をしたらよいか、具体的に考える。

グループで検討した内容は模造紙に書き込んで、他グループにも紹介する形が取られました。

12月6日には、今回の内容の続編に当たる「生活情報の入手をサポートしよう！2」が予定されていますが、それに向けては、今回グループで検討した内容について、実際に検証し、更に何が必要かについて検討しておくことが宿題とされました。そして次回は、その検討状況について振り返り、その時点までの実習の内容も加味して、より具体的に教室での練習内容を考える形で進めるということが参加者に伝えられました。

- 3) 「一言感想文」記入 20：30～20：40

所感

参加者アンケートの段階では、外国人にとってどのような生活情報が必要になるかイメージするのが難しいと思った方が多かったようですが、具体的な家族構成をイメージすることでより考えやすくなったようです。みなさん、終始和やかなムードでグループワークも進められました。ただ、どのようなことができるようになる必要があるか、そのために教室でどのような練習をしたらよいか、という部分になると、具体的なイメージが湧かない方も結構いらっしゃいます。皆さん「楽しい、楽しい」とおっしゃるのです

が、中には、具体的な教え方を知りたい、という声もあり、実習へ向けて、参加なさっている皆さん自身がいかに学んでいかれるのかも考える必要があるのではないかと、とも思いました。

連絡事項

- ・ 10月25日（土）の会場は東公民館になります。

あらかじめお伝えしてあるように、10月25日（土）の会場は東公民館です。

参加者の中には自家用車で通っていらっしゃる方が多いのですが、東公民館の駐車場はとても狭いとのことですから、10月18日（土）には、出来るだけ乗り合わせて集まれるよう念のために伝えておく必要があります。

以 上

（報告者）新山

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第5回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年10月4日（土） 18：00～20：30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
（ホワイトボード・演壇・受講者用机・椅子のみ）
- ・出席者数：22名（申込者総数39名）

当日の流れ

1) 講義：「教えるポイントを整理して実践しよう2～文法の整理1～」

18：00～20：25

（途中休憩：19：15～19：25）

レジュメに沿って進めました。

今回も4～5名のグループに分かれて座ってもらい、グループワークも取り入れて進めました。

今回は、「文法の整理1」ということでしたが、日本語を教えている方とまったく学んだことがない方が混在しているので、品詞の整理をテーマとし、学習者に見られる誤りを品詞という観点から考えつつ、名詞・動詞・イ形容詞・ナ形容詞・連体詞・副詞を中心に、2つずつの品詞の文法的特徴の違いを対比的に整理しながら進めました。

2) 「一言感想文」記入 20：25～20：30

所感

今回も終始和やかなムードで進められました。

地域の教室で教えている方の中にも「学習者からの質問にうまく答えられなかった」という方もいて、グループワークの中では、ああでもないこうでもないと色々と意見交換もなされていました。こうしたことをきちんと整理しておく必要があるという声が聞かれました。

あと、「文法の整理」が1回ありますが、教え方と絡めて取り上げられれば、より実践的になるのではないかと思います。

連絡事項

- ・8月25日の会場について

前回もお伝えした通り8月25日は東公民館で行われますから、事前に参加者にも注意を喚起しておく必要があります。久喜市在住の方はご存知のようですが、白岡地区等他地域の方も参加されているので、地図をもらってきました。11日と18日の回で地図を配布し、駐車場のスペースに限りがあるので出来るだけ乗り合いで来るように伝えておく必要があると思います。

以 上

（報告者）新山

2008. 10. 11

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第6回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年10月11日（土） 18：00～20：30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
(ホワイトボード・演壇・受講者用机・椅子のみ)
- ・出席者数：23名（申込者総数39名）

当日の流れ

- 1) 講義：「教えるポイントを整理して実践しよう3～日本語の音声と発音指導～」
18：00～20：25
(途中休憩：19：15～19：25)

レジュメに沿って進めました。

今回も4～5名のグループに分かれて座ってもらいました。

音声の用語は、学習者に対して教えることはないものの、拍、長音、促音、有気音などは知っておいたほうがいいと思い、板書していきました。学習項目ごとに学習者の発音上の誤用例を提示し、正しい発音の伝え方をグループワークで考えてもらい、どんな方法が挙げたか、その場で言ったりやったりしてもらいました。方法はいろいろあり、学習者のタイプによってもどんな伝え方がわかりやすいか違うということを繰り返しお話ししました。

- 2) 「一言感想文」記入 20：25～20：30

所感

参加者の皆さんが受講に慣れてきた様子でした。グループワークも黙っているグループはなく、手を叩いてアクセントを教えようとしている人に、「それは拍感覚の指導だから違うわよ」などとざっくばらんに言い合って、指導方法を考えていました。

外国籍の方からの「日本人は間違いを直してくれない。残念」「発音を教えるときは、文字はローマ字じゃなくてひらがながいい」という発言は、他の受講者の参考になったことと思います。

以 上
(報告者) 小山

2008. 10. 20

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第7回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年10月18日（土） 18：00～20：30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
（ホワイトボード・演壇・受講者用机・椅子のみ）
- ・出席者数：21名（申込者総数39名）

当日の流れ

- 1) 講義：「教えるポイントを整理して実践しよう4 ～文法の整理2 動詞の活用～」
18：00～20：20
（途中休憩：19：10～19：20）

レジュメに沿って進めました。

4～5名のグループに分かれて座ってもらい、グループワークも取り入れて進めました。

まずレジュメのP1からP3を配布し、動詞の活用について考えました。学習者に見られる誤りの例、いろいろな動詞の様々な活用形を通して、動詞の分類を意識してもらいました。簡単な分類の仕方を紹介した後、実際に学習者には分類をどう教えるかという例を実演しました。その後、「ます形」からいろいろな活用形を導き出す規則を考えてもらいました。

後半は、「て形」を使った文型の一つとして、動作の継続を表す「～ています」の教え方について扱いました。グループで話し合い、イメージしてもらった後、レジュメのP4からP6の授業例を配布し、実演を交えながら紹介しました。あくまでも「教え方の一例」ということで、これが唯一絶対のやり方ではないということを強調し、受講生の方のアイデアも取り上げつつ進めました。

- 2) 「一言感想文」記入 20：20～20：30

所感

今回初めて担当させていただきましたが、これまでの報告のとおり、皆さんとても和やかで明るく、積極的な方達でした。

活用については、既によく知っている方と、全く考えたことがなかったという方に分かれてましたが、どの方も基礎的な知識として大切だという認識を持たれていたようです。

授業例についても、積極的に質問やアイデアが出て、よい刺激になったようです。

連絡事項

- ・10月25日の場所が東公民館だということについて、再度アナウンスをしました。

以 上

（報告者） 乾

2008. 10. 25

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第8回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年10月25日（土） 18：00～20：30
- ・場所：久喜市東公民館 2階研修室
（ホワイトボード [マーカー持参] ・受講者用机・椅子のみ）
- ・出席者数：21名（申込者総数39名）

当日の流れ

- 1) 講義：「教えるポイントを整理して実践しよう5～会話の指導～」
18：00～20：25
（途中休憩：19：00～19：10）

レジュメに沿って進めました。

研修室が狭かったので、受講生と相談の上、講義形式の形態で座り、グループワークのとき、左右前後振り向いて話し合うことにしました。

講義内容は①外国人の日本語レベルを考える、②コミュニケーション能力、③会話の練習（定型的・制限的なものから自由なものへ）、④より自由な会話への展開、の4点です。③ではサバイバルの会話とロールプレイ（制限的なものからより自由なものへ）の指導方法を考えていきました。そして、④では学習者とより自由に会話を楽しむのに役立つ要素を取り上げ、今後のテーマである「おしゃべりで学ぼう」につながるように話をしました。

- 2) 「一言感想文」記入 20：25～20：30

所感

外国人の日本語レベルを考えると、「自分の日本語をモニターする」という話をしましたが、外国人と会話をするときに、自分がどのような日本語を使っているのか気にせずに話している人がかなり多いようでした。この点に関して今回講義内容の予定であまり時間を割くことができませんでしたが、「自身の日本語を振り返る」ということから「外国人にわかりやすく話す」ということを考えることをもうすこし行なってもいいように思いました。

以上
（報告者）吉川

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第9回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年11月1日（土） 18:00～20:30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
（ホワイトボード・演壇・受講者用机・椅子のみ）
- ・出席者数（申込者総数39名）：19名 ＊Sさん20時ごろ所用で早退

当日の流れ

- 1) 講義：「教えるポイントを整理して実践しよう6 ～待遇表現の指導～」
18:00～20:25（途中休憩：19:10～19:15）

レジュメに沿って進めました。

4～5名のグループに分かれて座ってもらい、グループワークも取り入れて進めました。

- ①レジュメP1～4を配布
- ②敬語の間違い探し（P1） 個人→グループワーク
- ③敬語について意味・用法の確認（P2）
- ④P1の間違い探しについて答え合わせ
- ⑤敬語の導入について（P3） グループワーク→その場で発表→P5・6の導入例を配布し、実演と解説
- ⑥敬語を使った会話練習について（P4） グループワーク→その場で発表→P7の会話例を配布し、解説
- ⑦P8を配布し、「敬語の指針」について軽く説明

導入例や会話例などは、あくまでも「一例」ということで、これが唯一絶対のやり方ではないということを強調し、受講生の方のアイデアも取り上げつつ進めました。

- 2) 「一言感想文」記入 20:25～20:30

所感

授業の最初に、敬語に関して質問をし、挙手で答えてもらいました。ボランティア教室などで敬語の指導経験のある方が1/3ほど、自分自身が敬語に苦手意識を持っているという方が約半数いらっしゃいました。講義中の様子からも、敬語の知識や理解度に関して、受講生の中になかなか差があるのを感じました。

今回、受講生からいろいろと引き出しながら進めようと考え、レジュメに空白部分を多めに入れたのですが、ホワイトボードの文字を写したり、説明を聞き取ったりするのが大変そうな人もいらしたので、反省しました。

全体的に「敬語って難しい」という声が多く聞かれましたが、指導経験のない人や敬語が苦手という方には敬語の分類が参考になったようですし、指導経験のある人や敬語に自信のある人には、後半の会話練習のポイントが新鮮だったようです。

以 上
（報告者） 乾

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第10回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年11月8日（土） 18:00～20:30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
(ホワイトボード・演壇・受講者用机・椅子のみ)
- ・出席者数（申込者総数39名）：20名

当日の流れ

1) 講義：「おしゃべりで学ぼう1 ～実践的指導1～」

18:00～20:25（途中休憩：19:10～19:25）

今回はゲストが参加しました。受講生のお一人が連れて来たキルギスからの研修生です。

国際交流基金の日本語学習者訪日研修に参加しているそうです。

せっかくなので、キルギス語3単語を受講生に教えてもらいました。

その他は、レジュメに沿って進めました。

4～5名のグループに分かれて座ってもらい、グループワーク中心に進めました。

①ゲスト自己紹介、簡単な質疑応答

②レジュメ p.1～6 を配布

③『平成19年度文化庁委嘱 対話を中心とした交流活動のカリキュラム』について説明 (p.1)

実践的な指導方法を知ってもらうため、今回から何回かは実践練習を中心に進めていくことを説明

④実践練習：教師がモデル見せ→グループ練習→代表者が練習成果を発表（着席のまま）(p.2～4)

名詞の導入・練習は、ゲストにキルギス語でやってもらいました。

⑤「あれは～です」の導入方法を考える（グループワーク）

⑥「あれは～です」の導入・練習部分のレジュメを配布し、教師がモデル見せ (p.7) →グループ練習

⑦「～は何ですか」(p.5)の導入部分、「これ／それは～です」「～は何ですか」を使った会話の例示 (p.6) を教師がモデル見せ

導入例や会話例などは、あくまでも「一例」ということで、これが唯一絶対のやり方ではないということを強調し、受講生の方のアイデアも取り上げつつ進めました。

2) 「一言感想文」記入 20:25～20:30

所感

偶然、キルギス人のゲストが参加してくれたので、ミニ外国語学習体験を取り入れることができました。キルギス語はロシア語に似て発音が難しく、わずか3語を覚えるのにも皆さん苦労していました。「日本語学習者の気持ちがあった」という声が聞かれたので、やった甲斐がありました。

その後の授業は実践練習を中心に進めました。千駄ヶ谷の日本語教師養成講座の受講生は、教師のモデルどおりに練習しようとするものですが、久喜の受講生は、練習タイムになると自分のやり方で進める人が多く、大らかさを感じました。授業の進行とともに、一つ一つの活動の意味、絵カードの位置の意味などについて問いかけを増やしていき、授業というのは事前の計画に基づいて進行する部分と、学習者に臨機応変に対応していく部分の両方から成ることを伝えました。練習タイムの後で、「成果を発表してみませんか？」と促したところ、Sさんが着席のまま発表してくれました。その後、練習が終わる度に発表してもらうようにし、全部で5人に当てました。ただし、負担にならないように、導入だけ、定着の確認だけといった、部分的な発表を多くしました。

どのグループにも言えることは、教師が発話しすぎることです。「発話の主役は学習者」ということを何度かコメントしました。実践練習が多すぎるという声が出るかと思いましたが、そんなことはなく、皆さん和

気藹々と練習していました。

連絡事項

- ・ 時間の関係で「～は何ですか」と「これ／それは～です」「～は何ですか」を使った会話は、導入・例示のみ見せたので、次回、復習を兼ねて練習部分を取り上げてください。

以 上
(報告者) 小山

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第11回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年11月15日（土） 18:00～20:40
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
- ・出席者数（申込者総数39名）：20名

当日の流れ

1) 講義：「教案教材作成演習1 ～実践的指導2～」

18:00～20:35（途中休憩：19:10～19:20）

前回の流れを受ける形で実践的な指導の基礎を取り上げました。

当初は、今回作成した教案を整えて提出してもらい、教案指導、実習に繋げていく流れを考えておりましたが、特に提出を促すことはせず、時間内で考えて実践することを積み上げて、年明けの実習に繋げていくということをも冒頭でも伝えました。

「教案教材作成演習1」というタイトルもありますので、グループワークを通して教案の空白部分を埋める形で考えてもらい、グループで検討した内容を共有した上で進め方の例を資料として配布し、さらに発展させるという流れで進めました。

- ①レジュメ p.1～3 を配布
- ②今回の内容と狙いの確認をした上で、前回のおさらい。
- ③レジュメ p.3 の「会話の教え方」について、その流れを考えてもらい引き出す。
- ④実践練習：冒頭の「状況人物設定」と「会話の例示」のみ教師のモデルを見せ、その後はグループで進め方を検討し、練習→代表者が練習成果を発表（着席のまま）。
- ⑤レジュメ p.4～5 を配布。「いくらですか」の導入会話を考える（グループワーク）。
- ⑥グループで検討した導入会話の中からフォローが必要な項目を抽出してもらう（グループワーク）。
- ⑦グループで検討した上記内容を代表者に発表してもらい、クラスで共有。
- ⑧共有した項目の中から、「数字・円」、「この／その／あの」、「助数詞」について、その導入と練習を検討（グループワーク）。
- ⑨各項目について検討成果を発表してもらい、その度にレジュメ p.6～7、8～9、10～11 を分けて配布し、ポイントを解説。

今回も、導入例や会話例などは、あくまでも「一例」ということで、これが唯一絶対のやり方ではないということを強調し、受講生の方のアイデアも取り上げつつ進めました。

その上で、今回検討した内容も踏まえて、「いくらですか」の会話の教え方を各自イメージしてくるよう、ということも伝えました。

2) 「一言感想文」記入 20:35～20:40

所感

前回の流れを受け継ぎ、こちらからインプットするのではなく、まずはグループで主体的に検討することから入り、検討内容を共有しつつ、活動の意味やヒントの提示の工夫など共に考えていくという流れにしました。

今回は「教案教材作成演習」ということで、組み立てを考えることと具体的なフォローの仕方を実践することによって主眼を置こうとしましたが、導入の仕方や進め方のイメージを共有するという段階にとどまりました。皆さん何となくイメージできるようですが、具体的にどうすればいいか、相手のレベルに応じて発話のレベルをどう変えればいいのか、といった点について、「これだと通じないんじゃないか」というように何かをつかみ始めた段階のように見受けられます。

どのグループも今回も和気藹藹としており、メンバーも定着してきた感があります。実習に向けて、実践面をどのように導いていくべきか、考えていく必要があると思います。

連絡事項

- ・ 次回は「東公民館」となります。受講生の方々はスケジュール表で確認しており、参集方法についてもお互いに打ち合わせていました。

以 上
(報告者) 新山

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第12回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年11月22日（土） 18：00～20：40
- ・場所：久喜市東公民館 2階研修室
- ・出席者数（申込者総数39名）：19名

当日の流れ

- 1) 講義：「外国人生活者と語ろう」 18：00～20：20（途中休憩：19：20～19：35）

今回は、齋藤委員が中国帰国者のMさん（黒竜江省出身・50代・女性）をお連れになりました。会場の東公民館では、椅子を円形に配置し、齋藤委員、Mさんも車座に入る形で和やかに進められました。

① 中国帰国者の背景（歴史的経緯・帰国の状況・支援の現状等）について

齋藤委員から、レジュメに沿って解説。実際には孤児の認定を受けるに足る書類がなく帰国できない人も多いという現実も語られました。

② Mさんのお話

齋藤委員の質問に答える形で、Mさんのお話がありました。途中途中で参加者の質問を受ける形で進められました。また、「帰国者一世と二世三世、それぞれの『介護制度』」という読み物を通して、介護の在り方について意見交換する場面もあり、休憩時間も参加者が個人的にMさんに話しかける光景も見られました。

（中国からの帰国）

- ・ 1985年来日。来日時は33歳。中国では黒竜江省で保育園の保母をしていた。日本へ来るまで1年ぐらい準備期間はあったが、30代で日本へ行きたいという気持ちはなく、来日前に言葉を学ぶということとはしなかった。
- ・ 来日し、最初は山梨で3年間、夫と娘と共に生活。日本語は、学ぶ手立てもなく、娘と一緒に娘の国語の本を読んで勉強し始めた。
- ・ 自分はなかなか日本語が覚えられず、娘はPTAの会や授業参観に自分が来ても「中国語で話さないで」と言っていた。幸い、娘にいじめなどはなかった。学校側にも理解があった。

（日本での生活）

- ・ 山梨にカシオの工場があり、ラインで働くことになった。娘は小学生だったが、幸いいい先生に出会い、学年を下げられずに済んだ。
- ・ 日本の習慣について教えてくれる人が身近におらず、日本の水道水が飲めることも知らずに娘には水筒を毎日持たせていた。お弁当で冷えた御飯を持たせることにも抵抗感があり、娘には菓子パンを持たせていた。
- ・ 3年後、やはり東京へ行こうということになり、保谷市へ転居。アパート探しが大変だった。外国人という理由だけで断られた。その後、練馬へ転居。子供が増え3人になった。子供を保育園へ送り、自分は日本語学校へ行き、また自動車学校へも通った。

（母語保持の問題）

- ・ 「帰国」とは言っても、中国出身という意識は変えられない。娘は日本語を覚えれば覚えるほど中国語を忘れていく。自宅では中国語で話す、というのを家の決まりにした。

- ・ 子供が3人いる中で、長女は中国生まれだが、下の2人は日本で生まれ育ったこともあり、理解はできても運用が難しい状況にある。
- ・ 親が余程意識を持ち、子供も学ぶことに価値を感じないと、母語の保持はなかなか難しいのが実情。

(「同歩会」との関わり)

- ・ 中国からの帰国者は練馬区や豊島区に多いが、以前はそうでもなく、支援体制も整っていなかった。1996年に「同歩会」(中国「帰国者」・家族とともに歩む練馬の会)という組織ができた。日本語教室や中国語教室、主に帰国者の子弟のための中国語保持教室、中華料理教室といった活動の他、帰国者からの電話相談にも対応している。事務局のメンバーは11名いるが、普段関われる人は5～6名。活動はボランティアスタッフや賛助会員からの寄付で賄われている。
- ・ 「同歩会」に寄せられる相談はいろいろある。子供の保育園のこと、都営住宅への申し込み方法、職場のトラブル(挨拶しないてぶっくらぼうと敬遠されることなど)、中国から子供を呼び寄せるための手続き、年金問題、介護問題(仕事で介護できない、施設に入れようにも言葉が不安、など)などなど枚挙に暇がない。
- ・ ようやく区の福祉事務所にも中国語の相談窓口ができ、Mさんも週1回担当している。
- ・ 介護に関しては、一世世代が高齢化する中、帰国者の中にも介護ヘルパーの3級や2級を取得する人も出てきた。最近、介護講座を修了してヘルパー資格を得た帰国者が立ち上げたデイサービス施設もある。

(支援の今後へ向けて)

- ・ まだまだ帰国者側の情報が不足している。
- ・ 生活上どのような情報が必要か、体制ができていない現状がある。
- ・ 愚痴を言っても始まらない。草の根的に動いていくことで受け入れ態勢を強化していくしかない。

2) 「生活情報の入手をサポートしよう2」に向けて 20:20～20:35

9月27日の第4回で取り上げた「生活情報の入手をサポートしよう1」の際にグループで作成した内容を再確認し、12月6日の2回目までにその内容を各自検証し、他にどのような情報が必要かを検討してもらうよう申し合わせ。

3) 「一言感想文」記入 20:35～20:40

所感

今回いらしたMさんは、このような機会が初めてとのことであるが、いろいろ不安もあったようですが、車座での和やかなムードの中、齋藤委員とのやりとりを通して、冷静に客観的に語っていました。研修生の皆さんも聞きながら熱心に聞き入っており、帰国時の戸惑いや不安、子供さんの学校のこと、支援の状況といったことについて質問が出た他、ノンネイティブの研修生からは子供の母語保持について現実的にどうすればいいか、といった質問もなされました。

Mさんの語りは決して感情的にならず冷静なものでしたが、研修生一同そのバイタリティに驚いており、その原動力は何か、ということを知りたいがっていました。Mさんとしては、一緒に「帰国」した子供を放っておけなかった、ということで、子供の存在が御自分にとって大きかったと話していました。

日本語の支援も含め、現状に対しては愚痴や不満を言うのではなく、まず活動してその輪を広げていかないと状況は好転しないという前向きな姿勢に皆考えさせられていたようでした。

連絡事項

- ・ 今回配布された資料の中で、『同声・同気 第22号』に収められた「帰国者一世と二世三世、それぞれの『介護制度』」の枚数が足りませんでした。次回15枚程度印刷してお持ちください。

以上
(報告者) 新山

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第13回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年11月29日（土） 18：00～20：30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
- ・出席者数（申込者総数39名）：17名

当日の流れ

- 1) 講義：「外国人とのコミュニケーション方法を身につけよう2～実践的指導3～」
18：00～20：20（途中休憩：19：15～19：25）

今回は、実践的指導の3回目で、イ形容詞と動作動詞を取り上げました。「高い時計ですね。－－そうですね。」のような終助詞にも触れ、自然でありながら初級レベルの学習者にも理解される会話について、考えてもらいました。

- ① レジューメ配布（全頁）
- ② イ形容詞と動詞について、文法的な確認（復習）
- ③ 「大きい－小さい」の導入・練習を紹介→練習。（グループワーク）
- ④ 他のイ形容詞のペアの導入を考える→その場で発表。（グループワーク）
「新しい－古い」「高い－安い」「難しい－易しい」「おもしろい－つまらない」「おいしい－まずい」
- ⑤ 「この／その～は（イ形容詞）です。」の導入・練習を紹介→練習。（グループワーク）
- ⑥ ⑤の練習後、「A：高い時計ですね。B：そうですね。高い時計ですね。」という練習を行うには、どのような手当てが必要か考える。（個人）
- ⑦ 「私はりんごを食べます。」の導入・練習を紹介→練習。（グループワーク）
- ⑧ 他の動詞の導入・代入を考える→その場で発表。（グループワーク）
「飲みます・書きます・読みます・見ます・聞きます」
- ⑨ 定着の確認の方法としてTPRを紹介。
- ⑩ 動詞の否定形の導入・練習を紹介。変形練習が初出。
- ⑪ 動詞のQA練習の例を紹介。

- 2) 「一言感想文」記入 20：20～20：30

所感

今回は、こちらから導入・練習の例を一つ見せたら、他の語の導入・練習を考えてもらう、という流れで進めました。実践練習に少しずつ慣れてきている様子でした。

今までの復習を兼ねて、「この／その」を使った文を取り上げましたが、練習の様子を見てみると、「この」と「その」の違いは意識されていないようでした。その点をコメントすると、「ああ、そうだった」という反応が見られるのですが、再度練習をしてもらうと、元のとおりといった状況でした。

どのグループも楽しそうに練習しています。今後は、教わるほうの立場に立って考え、コミュニケーションにつながる言語形式の教え方、授業の流れというものを意識してもらえるといいと思います。

連絡事項

- ・ 前回不足していた「帰国者一世と二世三世、それぞれの『介護制度』」のプリントも配布しました。

以 上
（報告者）小山

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第14回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年12月6日（土） 18:00～20:40
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
- ・出席者数（申込者総数39名）：18名

当日の流れ

1) 講義：「生活情報の入手をサポートしよう 2」

18:00～20:30（途中休憩：19:25～19:35）

今回は、9月27日の「生活情報の入手をサポートしよう1」の続編に当たります。その回で、グループ別に生活情報としてどのようなものが必要か、それを入手するために教室ではどのようなサポートが必要か、について検討しました。そこで、今回までの間にグループで検討した内容を実際にシミュレーションし、その気づきを今回発展させ、教室でのサポートとしての授業の組み立てを各グループで検討するということを伝えてありました。ただ、前々回、齋藤委員ともお話しし、授業の組み立てのテーマについては共通のものを設定することにしました。

今回の実際の進め方としては、まず各グループで活動を振り返ってもらい、それを共有した上で、共通のテーマを設定し、授業の組み立てをグループごとに検討するという流れにしました。そして、授業の組み立ての共通テーマについては、これまで「実践的指導」と称して、日本語を支援する授業の流れに慣れ、分かりやすい日本語を使ってどのように理解を促すか、ということ、主に初級の文型項目を使って進めてきた流れを受けて、「可能形を使った会話への導き方」を取り上げました。これを次回の研修と年明けの実習1・2につなげていくと言う流れについても説明しておきました。

①レジュメ p. 1～2 を配布

②グループごとに、活動内容の振り返りを行なう。

③振り返りの内容を発表してもらい、共有。具体的には、各グループとも生活情報の入手についてシミュレーションしており、そのプロセスでわかったことや感じたことを発表。

(Aグループ：国籍取得の条件の確認)

- ・ 帰化の申請のためには法務局へ行く必要がある。
- ・ 引き続き5年以上日本に住所があること、20歳以上で独立して法律行為が出来ること、素行が善良であること、生計が立てられること、などなどの条件をクリアしていれば、まずは自身が法務局へ出向かなければならない。

(Bグループ：保育園入園のための手続き)

- ・ 市役所市民課でガイドブックをまずもらう必要がある。
- ・ 市役所福祉課へ行き、必要書類をもらって記入し提出する必要がある。
- ・ 入園の受付も許可も市役所がする。保護者の連絡先がはっきりしていないといけない。

(Cグループ：ハローワークでの職探しの支援)

- ・ ハローワークにも扱う内容の得意不得意がある。どこのハローワークを紹介するか見極めが必要。
- ・ 仕事の中身の説明など、窓口での質疑応答のサポートが必要。
- ・ 履歴書の書き方など書類関係のサポートが必要。

(Dグループ：賃貸物件探し)

- ・ 外国人を受け付ける不動産屋を探して紹介する必要がある。中には用語を対訳付で置いている不動産屋もあるが、外国人を受け付けないところもある。
- ・ 立地条件などの要望についての説明の仕方をサポートする必要がある。

(Eグループ：国民健康保険の加入)

- ・ 在留証明書を持って、市役所保険課を訪ねる必要がある。

- ④今後の研修内容について:今回から最終回の11回の内容について、スケジュール表も参照しながら概要説明。
- ⑤レジュメ p.2を見ながら、「可能形」とは何か、どんなときに使うかグループで考え、クラスで共有。
- ⑥教え方の大まかな流れについてグループで考え、クラスで共有。
- ⑦教え方の流れをグループワークで具体化していく。日本語テキストと該当箇所のコピーも参考資料として配布。
この作業には40分程度をかけ、途中と最後でグループの進捗状況を発表し合い、意見交換。

次回までに一通りイメージしてくるよう伝えました。

2)「一言感想文」記入 20:30～20:40

所感

今回は、まず、「生活情報をサポートする」ということで各グループがシミュレーションしてわかったことや感じたことを共有するというところから入ったのですが、各グループとも市役所の担当課に問い合わせたり出向いたりして知り得た事を具体的に細かく発表していました。そして、書類の記入や手続きが、日本人でもいかに分かりにくいのか、それをサポートするのがいかに大変か、ということが感じられたようで、そのことを熱く語っていました。

その後、文法的なことをおさらいした上で、グループワークで教え方の流れを検討し、その間にこちらから示唆をするという形で進めたのですが、相変わらず和気藹々と進めていました。

ただ、グループワークを中心に進めるよりも、教え方のノウハウをもっと教えて欲しいという要望も一部から寄せられました。今後は、実習に向けて進められるので、実践を通して学ぶ意義をもっと伝えていく必要もあると思います。

連絡事項

- ・ 参考資料として日本語テキスト『S J I 日本語』（千駄ヶ谷日本語教育研究所『コミュニケーション日本語』の旧版）を1冊ずつグループに配布したところ、購入希望者がいました。改めて希望を募ってもいいと思います。

以上
(報告者) 新山

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第15回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年12月13日（土） 18:00～20:30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
- ・出席者数（申込者総数39名）：17名

当日の流れ

- 1) 講義：「おしゃべりで学ぼう2 実践的指導5」
18:00～20:30（途中休憩：19:10～19:15）

今回は、前回12月6日後半に取り上げた「可能形を使った会話への導き方」の続編に当たります。これまで「実践的指導」の回では、日本語を支援する授業の中で、分かりやすい日本語を使ってどのように理解を促すかということ、主に初級の文型項目を使って練習してきました。その流れを受けて前回は、「可能形を使った会話への導き方」について、グループワークで授業案を具体的に考えてもらいました。

今回は、各自一通りイメージしてきたアイデアをグループで意見交換し、発表してもらうことから始めました。

その後、一つの例として、授業例の教案を配布し、グループで声に出して実践してもらいました。

具体的な進め方は以下のとおりです。

- ① 前回の続き：可能形を使ったQA練習と会話練習についてグループで意見交換→発表→アドバイス
- ② 授業例の実践（教案配布）
教案の内容を少しずつ区切って、簡単なモデル（実演とポイント説明）、グループワーク、アドバイスという流れを繰り返しました。
グループでの練習に熱が入り、時間がかかったため、グループワーク後の発表については、最初の2つの活動部分のみとなりました。

1. 挨拶・雰囲気作り	モデル→グループワーク→発表→アドバイス
2. 導入・リピート・代入	モデル→グループワーク→発表→アドバイス
3. 変形①	モデル→グループワーク→アドバイス
4. 変形②	モデル→グループワーク→アドバイス
5. QA練習	モデル→グループワーク→アドバイス
6. 会話練習	モデル→グループワーク→アドバイス
- ③ 今回の実践を振り返っての全体的な振り返り（講評と質疑応答）
- ④ 次回について

- 2) 「一言感想文」記入 20:25～20:30

所感

前回の続き（QA練習と会話練習の進め方）を具体的にイメージしていらしたのは各グループにお一人ずつくらいでしたが、グループで意見交換した結果を発表してもらった内容は、よく考えられた工夫のあるものでした。

授業例を実践するグループワークでは、教案のとおりではなく、「こんな例文もいいのでは」「ここでこ

んな活動も組み入れたらどうか」といったご自分達のアイデアや工夫を取り入れながら、和気藹々と練習なさっていました。

授業の流れを一通り実践したあとの全体での振り返り際には、「相手にわかってもらえるような言葉の選択」「言葉が分からない人にも通じるような工夫（表情・ジェスチャー・絵など）」の大切さと大変さを実感なさったようなコメントが多かったです。

最後に、次回はテキスト『対話を中心とした交流活動のカリキュラム』を忘れずに持ってくるようアナウンスしました。

連絡事項

- ・ 前回、参考資料として貸し出した日本語テキスト『S J I 日本語』（千駄ヶ谷日本語教育研究所『コミュニケーション日本語』の旧版）を4冊回収しました。次回、もう一冊回収をお願いいたします。
- ・ 『S J I 日本語』購入希望の方への対応（希望の募り方、販売の仕方など）を具体的にどうするか、内部で決めておく必要があると思います。

以 上
（報告者） 乾

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第16回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2008年12月20日（土） 18:00～20:30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
- ・出席者数（申込者総数39名）：17名

当日の流れ

1) 講義：「おしゃべりで学ぼう3」

18:00～20:30（途中休憩：19:20～19:30）

今回は、昨年度の文化庁委嘱事業『対話を中心とした交流活動のカリキュラム』を実際に使い、おしゃべりを体験してもらいました。前回までは文法・文型を中心にした教え方を取り上げてきましたが、今回からはおしゃべりを中心にした交流活動の方法を取り上げていきます。

今回は、ボランティア日本語教室に来る学習者のニーズの多様性を確認したあと、おしゃべりを通して学習者とコミュニケーションを図りながら、彼らの日本語の不十分な点を補っていく方法を身に付けることが、支援者としての力の幅を広げることになる、ということを確認し、実際のおしゃべりに入っていました。

はじめにプリントを配布し、その内容に沿って進めました。

① これから目指すこと（15分間）

- ・ 日本語教室に来る外国人のニーズにはどんなものがあるか、具体例を挙げてもらった。
- ・ 今後の授業で受講生に身に付けてもらいたいことは、おしゃべりを通して学習者と交流し、相手が言いたくても言えないもどかしさをうまく捉えて言葉を補足していく方法であることを、確認した。

② 『対話を中心とした交流活動のカリキュラム』について（20分間）

- ・ 【このカリキュラムを使用する方へ】【活動の流れと留意点】のページを使い、具体的にどのようなカリキュラムなのかを説明した。

③ おしゃべりを体験しよう！（35分間）

- ・ 「盗難」（p.58）をテーマに、受講生同士でおしゃべりをしてもらった。

④ 振り返ってみよう！

- ・ 「まとめ」（p.59）に、おしゃべりを通して知ったことやわかったことを書いてもらった。（10分間）
- ・ 自分たちでおしゃべりをしてみてどうだったか、学習者相手の場合だったら、どんなことに留意すべきか話し合い、発表してもらった。（15分間）

⑤ 学習者に伝えてみよう！

- ・ 学習者の知らない言葉（「招き猫」「だるま」）について、わかりやすく伝える方法を考えてもらった。（10分間）4グループあるので、2グループずつ言葉を振り分けた。
- ・ 「だるま」の2グループに伝え方を発表してもらった後、「だるま」「招き猫」に関する資料（インターネットからのもの）を配布し、目を通してもらったあと、「招き猫」2グループに発表してもらった。（20分間）
- ・ 伝え方について、どんなことに留意すべきか、振り返ってもらった。（5分間）

2) 「一言感想文」記入 20:20～20:30

所感

日本語教室に来る学習者のニーズは、漢字の勉強、日能試対策、日本人配偶者を含む家族とのコミュニケーション力をつけること、等々多岐にわたっていますが、一番多いのは、日本で生活する上で必要な会話力をつけ、日本人とコミュニケーションすることだとの意見が多数でした。

「盗難」をテーマにおしゃべりを体験してもらいましたが、どのグループも、35 分間では物足りない、もっともっと話したい、という感想でした。今回はノン・ネイティブのお二人が出席していたので、彼女たちのいた2つのグループは、学習者・支援者がいっしょになっておしゃべりするという、カリキュラム本来の目的の実践ができました。彼女たちの知らない言葉が出てくると、他のメンバーはイラストや文字を書いて伝えていましたので、正にカリキュラムの狙い通りのことが行われていたわけです。おしゃべりの後、彼女たちに感想を聞くと、「スピードが速くて、ついていけなかった」「難しい言葉が多くて、理解できなかった」とのことでした。グループメンバーにそれらに対する配慮について聞いてみると、「うなずいていたので、理解しているものだと思っていた」ということで、学習者の理解度を正しく捉えることの難しさを感じたようでした。

後半では、「招き猫」「だるま」を学習者にわかりやすく伝える方法を考えてもらいましたが、おしゃべり体験を踏まえて、イラストを使うなどして、まずは全体像を伝えようとするグループが多かったです。個別には、「だるまは達磨大師から来ている…」というところからスタートする説明もありましたが、概ね、ポイントは押さえられていたと思います。ここでも、ノン・ネイティブのお二人が、実際に課題の言葉の意味をよく知らなかったため、概念を伝える実践ができました。お二人がいたからこそできたことなので、他の受講生にはとても勉強になったことと思います。

次回も、おしゃべり体験＋概念伝達という内容で進めることになっていますので、「学習者が伝えたくても伝えられないところをフォローする」というところにポイントを置いてみようと思います。

連絡事項

- ・ テキスト（『コミュニケーション日本語』）購入希望の方への対応（希望の募り方、販売の仕方など）を具体的にどうするか、次回までに決めて、受講生に伝えたいと思います。

以 上
（報告者）小山

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第17回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2009年1月10日（土） 18:00～20:30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
- ・出席者数（申込者総数39名）：19名

当日の流れ

1) 講義：「おしゃべりで学ぼう4」

18:00～20:30（途中休憩：19:30～19:40）

前回に続き、昨年度文化庁委嘱事業『対話を中心とした交流活動のカリキュラム』を実際に使い、おしゃべりを体験してもらいました。

① 年末年始の話（10分間）

- ・ 年末年始をどう過ごしたか、簡単に質問。
- ・ 私自身の年末年始の旅行について、現地の写真を見せながら紹介。
- ・ 今回のレジュメを配布。

② おしゃべりを体験しよう！（40分間）

- ・ 『対話を中心とした交流活動のカリキュラム』『趣味・好きなこと』（p.84）をテーマに、受講生におしゃべりをしてもらった。
- ・ いつも同じメンバーでグループを組んでいるので、いつもとは違うメンバーでグループを組んでももらった。
- ・ グループの中の一人は支援者役として、口火を切る役割を担ってもらった。

③ 振り返ってみよう！

- ・ 「まとめ」（p.86）に、おしゃべりを通して知ったことやわかったことを書いてもらった。（10分間）
- ・ 自分たちでおしゃべりをしてみてどうだったか、特に、今までと違うメンバーで話したことや、前回の「盗難」というテーマと比べたときに、何が違ったか話し合い、発表してもらった。（30分間）

④ 学習者に伝えてみよう！

- ・ 学習者の知らない言葉（「七五三」「節分」）について、わかりやすく伝える方法を考えてもらった。（20分間）
- ・ 全グループに「七五三」か「節分」を選んでもらい、伝え方を発表してもらった。その後、内容確認のために資料（インターネットからと本からのもの）を配布した。（20分間）

⑤ 作ってみよう！（5分間）

- ・ 宿題として、「まわりの人と知り合おう！」（p.69）のコミュニケーション・ツールを作ってもらったことを伝えた。これは、実際に支援活動をするときに、何かしらツールが必要になるのを想定している旨を説明した。
- ・ p.13【このカリキュラムを使用する方へ】、p.22～p.24【コミュニケーション・ツールの例】を参照し、イメージを持ってもらった。

2) 「一言感想文」記入 20:25～20:30

所感

前回は「盗難」が話のテーマで、他の人の話の内容を新しい情報として受け止めやすく、説明に使われる言葉が通じなかったらイラストや文字や平易な言葉への変換が必要だという実感をもちやすかったと思います。ところが今回は、「趣味・好きなこと」がテーマで、身近であるだけに、「新しい情報を得る」ということが実感できない人も出てきました。「メンバーのひととなりがわかって、興味深かった」という人が多数いた反面、「あまりよく知らない人に、自分自身のことは話したくない。自分が日本語教室で教えるときも、学習者のプライベートな面に入り込まないように気をつけている」という意見の方もいました。おしゃべりが途切れなかったグループは、「どこでそのことができるか」「いくらかかるか」「どんな人がそこに集まってくるか」などの情報が中心で、あまり話が弾まなかったグループは、「どうしてそれが面白いのか」「私は～と思う」のような、考え方や心情を中心にしていたようです。そこの違いに気付くと、「趣味・好きなこと」がテーマだからといって「自己開示を求められているようで、苦痛」という感想にはならないのでは、という話をしました。

また、「日本語教室に来て、雑談で終わってしまうと満足できない学習者が多いのではないか」との意見が出ました。そこで、前回の繰り返しですが、ボランティア日本語教室に来る学習者のニーズは多様であること、おしゃべりを通して学習者とコミュニケーションを図りながら、彼らの日本語の不十分な点を補っていく方法を身に付けることが、支援者としての力の幅を広げることになるということを説明し直しました。「勉強は好きだけど、話すのは好きじゃないという学習者もいる」という意見もあったので、「話さなければいけない」と思い過ぎない。聞いていることもその人にとっては意味のあること」と伝えました。

前回は初めてのおしゃべり体験で、「楽しい、面白い」という意見がほとんどでしたが、今回、少し疑問を持つ方々が出てきて意見交換ができたのはよかったと思います。おしゃべりを肯定的に捉えていた方々も異なる捉え方があることを知り、勉強になったようでした。

後半の言葉の説明では、「子供の無事を感謝し、今後の成長を祈願するため神社に出向く」という内容を、「子供が死なないで大きくなったので、神様にありがとうございますと言います。そして、これからも元気に大きくなるように、よろしくお願いしますという気持ちを神様に伝えるために、神社に行きます」のような伝え方が徐々にできるようになってきました。「節分」に関しても、鬼、豆、ひいらぎなどのイラストを描いて伝える方法も挙がり、だいたひ辞書的な説明から転換が図れてきたようです。

連絡事項

- ・ 以前からの課題であるテキスト(『コミュニケーション日本語』)購入希望の方への対応(希望の募り方、販売の仕方など)が間に合わなかったので、次回以降、伝えてください。

以 上
(報告者) 小山

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第18回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2009年1月17日（土） 18：00～20：30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
- ・出席者数（申込者総数39名）：21名

当日の流れ

1) 「実習1・内省活動1」 18：00～20：25（途中休憩：19：15～19：25）

今回から「実習」が始まるということで、実習1から4までの流れの説明の後、昨年度文化庁委嘱事業『対話を中心とした交流活動のカリキュラム』を実際に使い、実習と内省活動の1回目を実施しました。

① 実習と内省活動の進め方についての説明（15分間）

- ・ 配布レジュメに沿って、模擬授業形式で行う実習1・2と外国人学習者を対象に行う実習3・4という区分、実践の振り返りを基に行う内省活動について説明した。
- ・ 外国人学習者については、白岡地区で現在、日本語教室に参加している学習者に対して今月中に打診するとのこと。ただ、土曜の夜の時間帯に参加してくれるかどうか、微妙である由。

② 前回の宿題の確認とグループ分け（20分間）

- ・ 前回とはまた違うメンバーでグループを組んでもらった。今回と次回はこのメンバーで行うことを告げた。
- ・ 『対話を中心とした交流活動のカリキュラム』お付き合い編1「まわりの人と知り合おう！」（p.69）の「言葉のツール」「情報のツール」をグループ内で見せ合い、意見の交換。

③ 交流①の実践と内省活動

- ・ 途中、活動状況を見てフォローしながらカリキュラムに沿って実践してもらった。（30分間）
- ・ 自分たちでおしゃべりをしてみてどうだったか、気付いたことについて話し合い、発表してもらった。（40分間）

④ 交流②の実践と内省活動

- ・ カリキュラムに沿って実践してもらった。（15分間）
- ・ 自分たちでおしゃべりをしてみてどうだったか、気付いたことについて話し合い、発表してもらった。（15分間）

2) 「一言感想文」記入 20：25～20：30

所感

今回は、交流①のおしゃべりが挨拶や自己紹介でうまくできなかった経験について話し合う、という内容でしたが、日本人同士での模擬授業形式ということもあり、最初「何をすればいいのでしょうか」といった質問が出るなど、やや取っ付きにくいという印象がありました。また、その後の活動も日本人同士ではあてはまらないという反応も見られ、どうも、マニュアルに拘っているように見受けられたので、これまで繰り返し述べられているように、この流れは一例に過ぎず、トピックを基にして、どのようにおしゃべりを展開していくか、それはその時々状況（参加者や支援者の人となり、メンバー間の空気、など）によって変わること、学習者のニーズは多様であること、おしゃべりを通して学習者とコミュニケーションを図りながら、彼らの日本語の不十分な点を補っていく方法を身に付けることが、支援者としての力の幅を広げることになるということの説明し直しました。そして、私自身が以前インドで教えていたときに、

ヒンズー語の「ありがとう」に相当するとされる「ダンニャワート」という挨拶にまつわる体験談や、日本語の入門者に「おはようございます・こんにちは・こんばんは」と時間を区切って導入しても、家族間や職場の仲間同士で「こんにちは・こんばんは」は使うことがないことなどを話すと、感触がつかめたのかその後はああでもないこうでもないとおしゃべりが続き、交流①の内省活動ではかなり時間が超過するほど色々な意見が出ました。

前回、言葉の説明が取り上げられていたときと違い、今回は途中から皆さん自身がおしゃべりに打ち興じるムードになってしまい、これが教室で展開された場合にどうか、という捉え直しが余りなされていないように感じられ、そのことが終わった後気になりました。

連絡事項

- ・ 1月31日は会場が「ふれあいセンター久喜」となります。参加者の中には場所を確認し合っている人も見受けられましたが、次回は念のため場所が変更になることをお伝えください。
- ・ 実習3，4の外国人参加者への声かけの状況についても次回、聞いてみてください。

以 上
(報告者) 新山

2009. 01. 26

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第19回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2009年1月24日（土） 18：00～20：30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
- ・出席者数（申込者総数39名）：21名

当日の流れ

- 1) 「実習2・内省活動2」 18：00～20：15
(途中休憩：19：25～19：35)

昨年度文化庁委嘱事業『対話を中心とした交流活動のカリキュラム』を実際に使い、実習と内省活動の2回目を実施しました。

- ① グループ分けについて・宿題の確認（25分間）
- ・ 前回（1/17）と同じグループに分かれてもらった。
 - ・ 『対話を中心とした交流活動のカリキュラム』お付き合い編7「困ったこと・びっくりしたことについて話そう！」（p.95）の「言葉のツール」「情報のツール」について、準備してきたものをグループ内で見せ合い、意見の交換。
- ② 交流①（びっくりしたこと）の実践（25分間）と内省活動（35分間）
- ・ 今回は「模擬授業」であることを意識し、一人が支援者（教師役）、他が外国人学習者役になり、適宜役を交代しながらおしゃべりをしてもらった。
 - ・ 実践を行った後、交流④のまとめ（今日知ったことやわかったことを書こう！）を各自記入してもらい、その後、内省活動（自分たちでおしゃべりをしてみてどうだったか、気付いたことについて話し合い、発表）を行った。
- ③ 交流②（困ったこと）の実践（20分間）と内省活動（20分間）
- ・ 上記②の交流①同様、実践とまとめ、内省活動という順で行った。

- 2) お知らせ 20：15～20：20

- ・ 次回1/31の会場（「ふれあいセンター久喜」）について再確認。
- ・ 実習3（2/14）・4（2/21）の外国人参加者について：白岡のKさんに確認したところ、現在白岡のボランティア教室に参加している外国人で、5名ほど今回の実習に参加してくれる人が見つかったとのこと。全員2/14・2/21両日参加できるとのこと。日本語のレベルは様々だがビギナーではないとのこと。
ペルーの女性2名・ブラジルの女性1名・タイの男性1名・オーストラリアの男性1名

- 2) 「一言感想文」記入 20：20～20：30

所感

前回出された宿題（「言葉のツール」「情報のツール」）を準備してきた方が2名ほどしかいなかったため、2/21の実習4に向けて、何を準備すればいいかを具体的に考えてもらいました。

内省活動の際は、おしゃべりの中で外国人学習者が何（新しい情報・言葉・表現）をどれだけ得る（わかる・知る）ことができたか、おしゃべりの中で外国人学習者にどれだけ話してもらうことができたか（支援者の一方的な説明ではなく、外国人学習者から自分自身の経験や感想・意見を引き出す）の2点についても振り返ってもらいました。内省活動の発表や一言感想文からは、少しずつ実感がわいてきた方も増えてきたことが感じられました。

以 上
（報告者） 乾

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第20回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2009年1月30日（土） 18：00～20：30
- ・場所：ふれあいセンター久喜 3階第一会議室
- ・出席者数（申込者総数39名）：18名

当日の流れ

教案教材作成演習（作成）

『対話を中心とした交流カリキュラム』における「言葉のツール」を充実させるために、ことばの型（文型・談話型）という捉え方、および例文の作り方について話し、それぞれについて演習を行いました。

1) 「言葉のツール」の分析、「表現一覧」の基本的な考え方

18：00～19：40（途中休憩：19：40～19：45）

『対話を中心とした交流カリキュラム』の「生活編1 買い物に行こう!」「お付き合い編1 まわりの人と知り合おう!」「お付き合い編2 誘ってみよう!お願いしてみよう!」を取り上げ、それらの「言葉のツール」にどのような言語材料が取り上げられているのかを確認しました。その後、「言葉のツール」のうち文型のリストである「表現の一覧」について取り上げ、ことばを文型・談話型として捉える観点について話し、あるトピックから考えられる文型の抜き出しを行いました。

2) 例文作成 19：45～20：30

国語辞典と日本語教科書に取り上げられている例文を比較し、どのような例文を作成したらわかりやすいかについて考えていきました。そして、受講者から挙げてもらった、あるトピックを語るときによく用いられるだろうと思われる単語、文型・談話型の例文を作成しました。

3) 「一言感想文」記入 20：25～20：30

所 感

これまでの研修で受講者が「言葉のツール」を作成すると、単語のリストである「言葉一覧」は作れるが、文型・談話型のリストである「表現一覧」は作れないという報告があり、それを受けて研修の内容を組み立てました。

演習を繰り返す中、受講生は、あるトピックで用いられると予想される文型・談話型を挙げられるようになり、また、わかりやすい例文も作れるようになったので、その成果が今後の研修に反映されることを期待しています。

以 上
（報告者）吉川

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第21回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2009年2月7日（土） 18:00～20:30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
- ・出席者数（申込者総数39名）：21名

当日の流れ

- 1) 「おしゃべりで学ぼう5」 18:00～20:25（途中休憩：19:15～19:25）
これまで「対話を中心とした交流カリキュラム」を用いておしゃべり活動を行ってきましたが、その中で改善点も出てきました。今回は、主な改善点を取り上げました。
- ① おしゃべり活動の振り返り（5分間）
・自身のおしゃべり活動における問題点を挙げてもらいました。
- ② わかりやすい表現への工夫（40分間）
・弘前大学の「やさしい日本語」を例にわかりやすい表現への工夫について考えました。
- ③ 相手とともに作り上げて行く会話（30分間）
・ある対話例をサンプルに一方方向の会話と双方方向の会話の違いについて考えました。
・双方方向の会話に関連して自己開示について考えました。
・自己開示の受け手には同程度の量や深さの自己開示を相手に返す傾向があるという自己開示の返報性について話しました。
- ④ 話上手は聞き上手（30分間）
・人の話を聴くということがいかに難しいかについて自身の言語生活を振り返ってみました。
・どのようにしたらより人の話を聴くことができるか考えました。
- ⑤ 個人のフィルター（20分間）
・異文化コミュニケーションの観点から、個人の中にある意味づけ（コミュニケーション）のフィルターについて考えました。
・ステレオタイプに陥らないようにするにはどうしたらよいか考えました。
- ⑥ 話の展開（20分間）
・「おしゃべり」をファシリテートするにはどうしたらよいか考えました。

2) 「一言感想文」記入 20:25～20:30

所感

「おしゃべり活動」の振り返りをしましたが、受講生の方々は、「おしゃべり」を無駄にしないためにはどうしたらよいかという問題意識を持っていました。「おしゃべり活動」におけるファシリテーターとしての意識が出てきたのではないかと思います。誠に望ましいことだと思います。

連絡事項

- ・受講証明書発行のため「ひとこと感想文」に生年月日を書いてもらいました。
- ・来週は実習なので作成した「コミュニケーション・ツール」を持ってくるように言いました。
- ・佐々木委員が見え、これだけの講座を受講したのだから、4月からの支援活動に参加して欲しいと受講生の方々に伝えました。この件については私（吉川）のほうからも伝えました。

以上
（報告者）吉川

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第22回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2009年2月14日（土） 18:00～20:30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
- ・出席者数（申込者総数39名）：19名

当日の流れ

1) 「実習3・内省活動3」 18:00～20:20（途中休憩：19:30～19:40）

今回は外国人学習者を対象に行う実習の1回目でした。いつもの会議室が開始前から異常な熱気に包まれていました。9名の学習者を迎え、9グループに分かれておしゃべりを実施しました。

① グループ分け、タイムスケジュールの確認（10分間）

- ・日本人21名（うち2名は白岡の日本語教室の代表の方で、この研修の受講生ではない）、外国人9名だったので、日本人2～3名と外国人1名のグループを9グループ作り、席についてもらった。
- ・19:30で外国人は解散するので、最後には全員が「今日知ったことやわかったことを書こう！」を書いて終われるように伝えた。受講生はテキスト『対話を中心とした交流活動のカリキュラム』に、学習者は配布したプリントに書くようにし、その指示も自分たちでするように言っておいた。
- ・今日のおしゃべりは、テキストのお付き合い編1「まわりの人と知り合おう！」の交流①「挨拶・自己紹介」と、交流②「名前」であることを確認し、おしゃべりに入った。

② おしゃべり（80分間）

- ・各グループ自由におしゃべりをしてもらった。

③ 内省活動（40分間）

- ・学習者は解散し、受講生は4～6名のグループになって、「今日知ったことやわかったことを書こう！」にどんなことを書いたか、発表してもらった。
- ・おしゃべりをしてみてどうだったか、話し合ってもらった。話し合いのポイントは次の3点。
 - ①今まで学んだことが活かされたか。
 - ②学習者の知らないこと、うまくできないことを取り上げ、フォローしたか。
 - ③作成してきたコミュニケーション・ツールを使用したか。
- ・話し合いの内容を発表してもらった。
- ・次回の実習の課題がお付き合い編7「困ったこと・びっくりしたことについて話そう！」であることを確認。

2) 「一言感想文」記入 20:20～20:30

所感

今回は、外国人相手のおしゃべりということで、始まる前から受講生の皆さん興奮気味でした。当初、おしゃべり前の説明・確認に20分ほど掛けようと思っていましたが、皆さんのはやる気持ちに負け、10分でおしゃべりに移行しました。学習者の事前情報はなかったので、受講生にも何も伝えずにその場でグループを組んでもらい、おしゃべりをスタートさせました。

外国人は、基本動詞もままならない方から流暢に話せる方まで、様々な日本語レベルの方が集まりまし

た。初級レベルの方と組んだ受講生は絵や文字も駆使しながら、生活情報のみならず、文法、漢字、語彙等のいろいろなフォローをしていました。普通のやり取りはできるという方と組んだ受講生の中には、おしゃべりが弾み、特にフォローすることはなかったと言う方もいました。外国人の知らない情報を提供したり、発音についてアドバイスしたり、いくらでもフォローすべきことはあったのでは、という意見が周りから出ていました。

自分ばかり話してしまったという方もいましたが、「相手に質問ばかりしない、自分のことも話す」ということを自分に言い聞かせ、相手とバランスを取りながら話せたという方もいて、今までの研修の甲斐があったと感じました。

コミュニケーション・ツールは多くの方が用意して来ていました。ツールを学習者に渡した人は少なかったようですが、ツールの情報を基に学習者のフォローをしたという方が多かったです。「日本のお菓子について紹介しようと思って準備して来たら、組んだ外国人が和菓子屋に嫁いだ方で、紹介にならなかった」と苦笑する方もいましたが、外国人とのおしゃべりを楽しんでいた様子が目に浮かび、微笑ましく思いました。

学習者の中には、日頃ほとんど日本語を使う機会がないことにストレスを感じていたが、今日はストレス発散ができたと言う人がいたり、十分話す力があるのに自信が持てず、日本語を話すのは控えていると言う人がいたりして、受講生の中には「ますますあの人たちの力になりたいと思った」と、強く語る方もいました。学習者に書いてもらった「今日知ったことやわかったことを書こう！」には、あまり詳しい感想は書かれていませんが、受講生に対しては自分の現状を嘆くような発言をした人もいたようです。書くのは母語でもいいということを伝えてあったので、中国語、スペイン語、タイ語で書いた人たちがいました。今回はこれを回収し、受講生が訳せるものは訳してもらい、他のものは後日、千駄ヶ谷日本語教育研究所の教職員に訳してもらいました。

以 上
(報告者) 小山

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第23回目が終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2009年2月21日（土） 18:00～20:30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
- ・出席者数（申込者総数39名）： 23名

当日の流れ

1) 「実習4・内省活動4」 18:00～20:15（途中休憩：19:05～19:15）

今回は、前回に引き続き、外国人学習者を対象に行う実習の2回目を実施しました。前回は9名の学習者が来てくれましたが、今回は残念ながら1名のみ（中国から来た女性）の参加でした。来る予定の学習者に白岡の方達が連絡を取ろうとしていましたが、電話に出ないとのことでした。5分ほど待ちましたが、来てくれた学習者を待たせるのも悪いので、スタートしました。

① グループ分け

5グループに分かれました。

グループ1は中国人学習者と日本人4人、グループ2は受講生の中国出身の方と日本人4人、グループ3は受講生のタイ出身の方と日本人5人、グループ4は日本人4人、グループ5は日本人3人と私という内訳です。

② おしゃべり「お付き合い編7 困ったこと・びっくりしたことについて話そう！」（60分間）

グループ1は、中国人学習者がほとんど日本語が話せないという状況で、筆談やジェスチャー、中国語も織り交ぜて、おしゃべりしていました。グループ2と3は、それぞれ外国出身の受講生を中心にやりとりしていました。グループ4は、各自準備してきたツールを使って、話していました。グループ5は、私も参加しましたが、受講生の男性の奥様が中国の方ということで、その話題を中心に話しました。

③ 内省活動（35分間）

グループ1以外は、模擬授業と同じ内容で振り返るというのが間延びしそうだったため、その場で全員で意見交換と情報共有を行いました。

グループ1：（中国人学習者の話として）スーパーで卵を買おうとして言葉が分からず困ったときに、ジェスチャーや声で鶏が卵を産むまねなどをしたら何とか通じた。（←学習者の頑張りに受講生からは拍手が起きていました）「勉強」など、中国語と日本語で意味が違う漢字に戸惑った。

グループ2：（中国出身の受講生の話として）電車の時間の正確さ、本数の多さに驚いた。自分の日本語の基礎は日本語学校ですべて学んだが、日常生活の日本語や日本の情報はボランティア教室で教えてもらった。子育ての悩みなど相談できて良かった。

グループ3：受講生が準備してきたツールとして、「せかいのこどもたちのはなし はがぬけたらどうするの？」（世界各国で、子供の乳歯が抜けたときに何をするかという内容の絵本）、「ほっとごはん 具合の悪いとき、何食べるの？」（世界各国で、二日酔いや風邪などのとき、伝統的に何を食べるかを調べた本）という2冊の本が紹介された。

グループ4：（タイ出身の受講生の話として）日本とタイではお客さんのもてなし方が異なる。日本ではいきなりの訪問は嫌がられることが多く、その晩、泊めてあげるといってもないが、タイではもっとフランクに歓迎するとのこと。（←他の受講生からは、昔の日本はタイと同じだったという意見が出ました）

グループ5：（中国人の奥様を持つ受講生の話として）中国では料理は余らせるように準備する。日本では余らせないように準備する。

- ④ おしゃべり ※テキストの中から自由にテーマを選んで話す（20分間）
時間がまだあったので、テキストのまだ扱っていないテーマから好きなものを選んで、話してもらいました。

⑤ 内省活動（15分間）

その場で全員で情報共有しながら意見交換しました。

ごみの出し方、久喜の美味しいレストランの場所、日本の果物、防犯、本音と建前など、いろいろなテーマで話し合いが行われました。しかし、外国人学習者がいないため、ただの楽しいおしゃべりになっている場面もあったようです。

今回ただ一人参加してくれた中国の女性が、それまで恥ずかしそうに筆談中心に参加していたのが、「趣味」をテーマに話をしているときには、目をキラキラさせて、嬉しそうに日本語を使おうとしていたのが印象的でした。

2) 「一言感想文」・「修了アンケート」記入 20:15～20:30

所感

この2回目の実習を楽しみに、ツールなどいろいろと準備してきた方が多かったです。

それを外国人学習者に紹介・実施できなかったのがとても残念そうではありましたが、模擬は模擬なりに、積極的に「おしゃべり」してくださっていたと思います。

前回の実習1回目を欠席し、今回は日本人だけのグループだった受講生には、前回・今回と準備して使えなかったツールをぜひ、ボランティア教室で使ってくださいとお伝えしました。

以 上
(報告者) 乾

文化庁委託事業
企画委員各位

標記の件、第24回目（最終回）が無事終了しましたのでご報告いたします。

- ・日時：2009年2月28日（土） 18：00～20：30
- ・場所：久喜市中央公民館 4階大会議室
- ・出席者数：26名（申込者総数39名）

当日の流れ

1) 修了式 18：00～18：45

1. 開式の辞
2. 主催団体代表挨拶 …… 学校法人吉岡教育学園 理事長 吉岡正毅
3. 受講証明書授与
4. 来賓挨拶 …… 久喜市長 田中暄二氏
久喜市国際交流協会会長 斉藤文次氏
5. 閉式の辞

2) 実習総括 18：55～20：20

①グループに分かれての振り返り

5つのグループに分かれて、今回の研修で得られたことなどについて振り返りを行ないました。

会場には、前回前々回に実施した外国人も訪れており、各グループに入ってもらい、和やかな懇談もなされました。

②各グループからの発表

各グループから2名ずつ発表してもらいました。

（主な内容）

- ・ 外国人の方とコミュニケーションするというと身構えることが多いが、「こんにちは」「ありがとう」「さようなら」の3つだけでも相手の国の言葉でわかれば、交流できるのではないかと。
- ・ 講座を通して、外国人だけでなく、近所の人とのコミュニケーションについても考えさせられた。
- ・ ボランティアということでこれまで構えていたけれど、欲している人がいて、その人にどれだけのことが与えられるか、考えることが大切だと思う。相手に1与えようとする、10知っていなければならない。大変なことだが、経験を通して引き出しを増やしていきたい。
- ・ 4月からの地域の日本語教室で、今回身につけた対話型の日本語支援を活かしていきたい。
- ・ 講座を受けて、外国人である自分も外国人の立場で支援していこうという思いが強くなった。
- ・ 日本語支援については、まだまだ自信はないが、アシスタントとしてでも経験を重ねていきたい。
- ・ 文法を教える日本語教室と違って、おしゃべりのコミュニケーションをしながら相手の日本語をフォローするのは、やはり却って難しいと思った。
- ・ 「教える」ことの難しさを改めて考えた。しかし、他の皆さんのモチベーションの高さに影響されることも多かった。ボランティアを続けていくには人の繋がりが大切だと思う。これからも皆さんとの関係を大切にしていきたい。

- ・ 自分自身、日本語のこと、文法のことなどもっとブラッシュアップしなければと思った。
- ・ 日本語学校と地域の教室の違いについて考えさせられた。日本語学校では、体系的なカリキュラムを組んで理路整然と教えていく。自分は地域の教室にこれまで携わってきたが、「日本語を教えてあげます」というスタンスだった。しかしこれは間違っていた。「教えてあげる」ではなくて「友達のような関係で手助けする」というスタンスでないといけないと思った。自分が教えているのか、外国人の相手から教えられているのかわからないような関係が大切なのではないかと思った。

3) 「一言感想文」記入 20:20～20:30

所感と連絡事項

最終回は、修了式と実習総括と言う2部構成で進めました。

修了式では、主催団体の代表から受講した科目と時間数が明記された受講証明書を個別にお渡ししました。研修生の方々は感慨深げに受け取っており、特に出席率の高かった方から、全員一律のものではなく科目や時間数が入っていてよかったという声が聞かれました。

実習総括では、この5ヶ月の研修を振り返って和やかな懇談がなされ、今後の日本語支援での実践方法や個人的に身につけるべき課題など具体的なこともやり取りされていました。

既に、久喜市や白岡町などで春からの地域の日本語教室の運営についても話し合いが始められています。今回参加された方々の多くが参加されるとのことで、皆さん研修で身につけたことを実践しようという意気込みも感じられた最終回となりました。

以 上
(報告者) 吉川・内田・新山